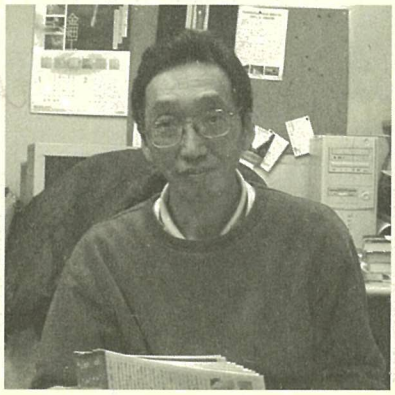
2007／春

季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

―越前和紙への提言―



■ 濱中淑光
東京世田谷区で経師店「濱中秀光堂」を営む経師職人。伝統的な和紙を使用した襖張り・壁張りを継承しながらも、職人の視点から和紙インテリアの新たな可能性に挑戦している。地元建築家と、住宅全てに和紙壁を張ったプロジェクトや住宅の洋風化で最近一般の人が目にすることがなくなった経師の技の世界を紹介するワークショップ開催などにも協力している。

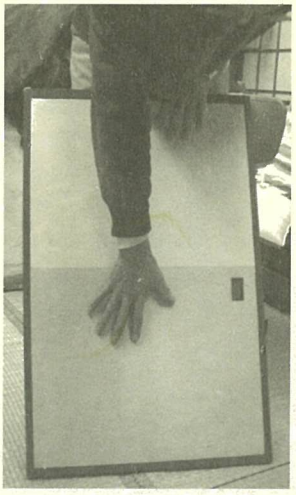
■ 濱中淑光さん（経師職人）「もっと職人になって欲しい」

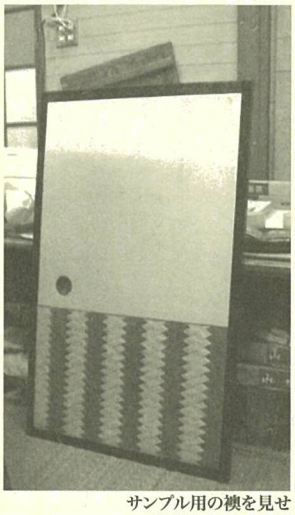
●住宅に和紙が使われなくなった経緯

一般的には戦後の住宅の洋風化と共に、住宅に和紙が使われなくなったと言われていますが、施工現場から具体的に眺めると、ビニールクロスができて下張りをしなくなったのが原因でしょう。昔は安いアパートの壁でも、はがれてくると、安い価格でしたが、袋張りをやっていたのです。それが少し経つと「ヘッシャンクロス」といって、ジュート糸をたて、よこ糸に使用した壁張り用平織物が使われるようになりました。このクロスは、壁面がベニヤ板でも表面のでこぼこを拾わず、袋をかける（袋張りで下張りする）必要がないのです。次にビニールクロスが出てきた時に、楮紙や桑チリ（下貼り用の和紙の一種。桑の皮などを漉き込んだもので茶チリ紙より丈夫。）で袋をかけると、紙の重なる部分のでこぼこをビニールクロスが拾ってしまうので、下張りをやらなくなったのです。また、壁面にはスイッチやコンセントもあり、始末もめんどくさいし、手間がかかるので、職人も袋張りを敬遠するようになり、技術が継承されなくなりました。住宅の供給が、建売り住宅やハウスメーカーの商品を買うという感覚になってくると、納期も早いので時間をかけていられない。住宅の価値も、建った時が百点で、次第に価値が下がっていくという具合になってしまいました。昔は、住んでいる人が職人と一緒に家を造っていくという感覚があって、塗り壁を中塗りした後は、家人は引っ越して、暫くして上塗りをかけるというようなこともやっていたのです。

●もっと職人になって欲しい

この世界で、今七十～八十代の親方の世代は「和紙」と言えば全て手漉きの事を言います。明治の始めに洋紙が入ってきた時、日本で作っていた紙を和紙と命名したそうで、その時は当然手漉きしかありませんから、和紙＝手漉きとなるわけです。私は個人的には、日本の文化に携わっている紙は和紙と言っていいのではないかと思っていて、機械漉きも使います。以前、産地の人と和紙の議論をしている時に、和紙＝いいもの＝高い＝使えない、と敢えて憎まれ口を叩いたのです。そしたらすごい反発があって、高くない、自分たちは大変な思いをして紙を作っていると言うのです。それは勿論知っていますが、ごく一般的な方々にとっては和紙とはそういう物ですと言ったのです。私は、紙漉きの人たちはもっと職人になって欲しいと思います。和紙は半加工品です。何かにして商品になる。私からすると、壁装材に使って始めてお金がもらえる。手漉きでもコストに見合ういろいろな物が欲しい。この予算で漉いてもらう方法がありますか？と聞いたとき、この程度の品質でこんな配合ならできますと自信を持って応えてくれる職人がいてほしい。最近は、アーティストのように芸術的な紙を漉く所もありますが、住宅需要の面では定番的に使う事ができる基本の紙を持っていてほしいし、エンドユーザーや職人の様々な要求の相談にのって欲しい訳です。こちらももっと使いたいのですから、値段に応じていろんな和紙がほしいのです。





サンプル用の襖を見せ提案することもある

●和紙のデメリットがメリットになる時

和紙を壁装材に使用する場合、汚れや毛羽立ちなどデメリットは沢山ありますが、それが同時に調湿効果や暖かみ、風合いといったメリットでもあるわけです。ある建築家との出会いで発見したことですが、お施主さんに一枚でも和紙を張って頂くと、その調湿効果や暖かみを実感して頂けるようです。こんなワークショップみたいなもので、和紙への理解を深め、ファンを作れば、益々和紙のデメリットがメリットになるように思います。

何年か前から本鳥の子が厚くなりました。その理由を産地の方に問い合わせたところ、明らかな施工クレームなのにメーカーから漉き元の方に改良（悪）の要請があったようです。こういうケースを防ぐためにも生産地と施工業者と販売元などで率直に話し合う場があったらいいなあと思います。

和紙はやはり一度張ってみると、その良さが実感できます。和紙を住まいに取り入れるには、建築家や和紙の研究会に入っている人、私のような職人など、和紙の好きな人に相談するのが、結局一番確実な方法だと思っています。中には和紙好きが高じて、ある産地に通って、趣味で漉いた紙を自分の住宅に張って欲しいという人などもいらっしゃいます。

「和紙の壁展」開催時に市松に張った漉き返し紙◀

屏風作りのワークショップの模様▼

流通レポート

■（株）森木ペーパー
「期待を裏切らない紙を提供」

（株）森木ペーパーの創業は、一九三八年（昭和十三年）、横浜市鶴見区に森木紙店を設立ことに始まる。創業者森木安美氏は、現社長伸二さんの叔父に当たり、創業以前は高知県で紙漉きを営む。その後、高知県伊野町の製紙会社の横浜支店に勤務。大手商社の紙輸出部の営業担当となり、その後独立。一九六四年、株式会社への変更を機に本社を鶴見区東寺尾に移転、和紙輸出専門商社として今日に至っている。北米・ヨーロッパを中心に取引先はおよそ三十ヶ国。家族経営の会社だが、和紙輸出の草分けとして海外ではよく名を知られている。社長の森木伸二さん、専務の森木貴男さんに昨今の和紙貿易事情を伺う。

専務の森木貴男さん

（株）森木ペーパー
http://www.morikipaper.co.jp

●ビジネス環境の変化

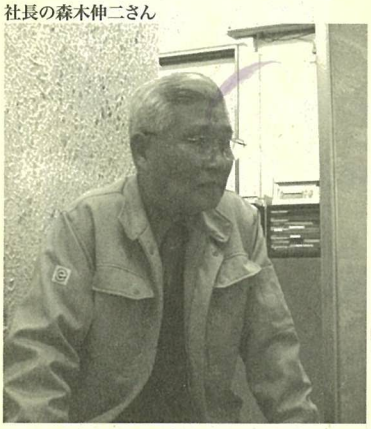
創業当初から全国の産地四十余りの和紙を扱っているが、当時は大手商社の紙パルプ部の引き合いに応じて、英文タイプライター原紙、美術品の補修裏打ちなどに用いられる土佐の典具帖紙（てんぐじょうし）、謄写版原紙などを輸出していた。現在、一五〇ヶ所の漉き場や工場と繋がりがあり、主に美術需要の紙（版画、製本、デジタルアート用等）、及び文化財修復用の和紙を供給している。

森木ペーパーと代理店契約を結んでいる海外の和紙供給会社は、北米三社、南米一社、オーストラリアに二社あり、ヨーロッパではドイツやイギリスの他、フランス、オランダ、オーストリア、イタリア、スペインなどに輸出している。以前は、一国に一代理店という形態だったが、昨今では、グローバル化に伴い、代理店も買収や合併を繰り返し、ビジネス環境も大きく変化してきた。インターネットの時代となって、業務は便利になってきたが、世界各地から直接来るビジネスの誘いには、対応できない側面もあるという。契約代理店の設定する価格を乱したり、和紙の価値を下げてはいけないからだ。

「最近は、タイ、中国、ネパール、インドなど、アジアの国からも自分達の紙や原料を買ってくれないか等の依頼が多く来るようになりました。しかし、私達は和紙を輸出する会社ですので、対応が難しいところです。」

●高品質にこだわる紙

十～二十年前に比べて世界の市場で手に入る紙の種類は何十倍にも増えているという。特にここ五年くらいの間に東南アジアの紙は技術レベルも上がり、確実に追いついてきている事が見本市に行っても分かる。これに和紙が対抗していくには、やはり他国に真似の出来ない紙を作り、かつ品質を落とさないことだ。特にアート需要を支える客は目が肥えていて、高いものでも質がよければ売れる。この分野では何と言っても色や品質の安定性がリピート需要に繋がる。文化財修復用の紙も侮れない市場。森木が供給した紙は、大英博物館やルーブル美術館、図書館の古い書物の修復用に使用されている。修復用和紙は成分や原料配合を元に修復するので、不正確な情報は、文化財そのものを痛めてしまいかねない。企業秘密に関わらない程度には詳細な情報を提供してほしいという。しばしば雁皮、楮など紙の原料が間違っていたり、国産楮と表記してあるものが輸入楮だったりする。「メーカーもモラルを守って販売して頂かないと、中途半端なものを出すと和紙の評判を落とす結果となり、今までの努力が水泡と帰してしまいます。」と危機感をもらす。

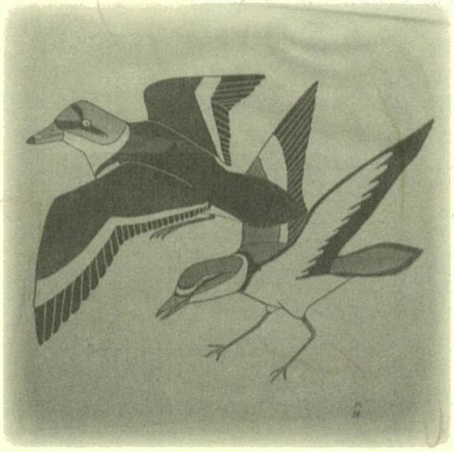


社長の森木伸二さん

●ユーザーが「本物の和紙」を理解することの必要性

従来からのアート需要については、永年の和紙ファンも多い。例えば、イヌイットアートの版画用には、品質の信頼性からいつも同じ産地の同じ紙指定で注文が来る。最近、アメリカでは手作りを楽しむクラフトやラッピング、高級ステーショナリー、ランプシェードなどの多彩な最終商品の材料として使用されている紙も多い。「越前の紙は高級なので、有名ブランドの

イヌイットアートになくてはならない和紙



香水のパッケージに使われていたのを、取引先の方から見せて頂きました。高級感を出すにはやはりいい紙でないといけないのでしょう。」和紙の本当の価値を海外のユーザーにも知ってもらうには、やはり情報発信をきちんとするとともに、買う側にも正確な知識を持ってもらうように教育していかなくてはならないとの問題意識から、三年前に代理店と共同でツアーを企画した。海外の製本家、修復家、アーティストなどを集めて、産地の漉き場、有名寺院の修復現場、和紙の道具屋さんなどを二週間ほどかけて見学。交通費、滞在費は参加者持ちだが、コーディネート料は一切取らず。イギリス、アメリカ、カナダから九人が参加した。「個人単位ではなかなか見せてもらえないような現場も、網羅して見てもらうことができましたので、随分和紙文化の理解に繋がったと思います。機会があればこのような取組も続けていきたいと思います。」と老舗の専務は意欲的だ。

海外の和紙関係者と回った和紙ツアーの模様

取組紹介

古代和紙の復元に燃える石川満夫さん

■こしの都千五百年プロジェクト「継体大王即位千五百年をバネに」

二〇〇七年は、第二六代天皇といわれる継体大王即位千五百年を迎え、福井県を中心に大王ゆかりの地では、この機を新たなものづくりの展望と飛躍のきっかけにしたいと「こしの都千五百年プロジェクト」が立ち上がった。越前和紙の産地からも紙の未来を展望する様々な企画が進行中だ。

「日本書紀」によれば、継体天皇は応神天皇五世の孫であり、父は彦主人王。近江国高嶋郷三尾野(現在の滋賀県高島市あたり)で誕生したが幼い時に父を亡くし、母の故郷である越前国高向(現在の福井県坂井市丸岡町高椋)で成長した。先代の武烈天皇に後嗣がなかったため、五八歳にして河内国樟葉宮で即位したとされるが、この即位事情を巡っては様々な議論がある。現在では、継体が必ずしも天皇家の血筋でなく、越の国の一有力豪族だったという説があり、技術力・経済力・人材豊富な地域力を後ろ盾に、当時の中央豪族(大和朝廷)の支持を得て平和裏に即位(五〇七～五三一年)したとする説が有力である。ともあれ継体は実在の人物で、天皇家の系譜は、彼以降はほぼ正確であるとされている。

プロジェクト実行委員の一人、石川製紙(株)の石川満夫さんにお話を伺う。

●産地における継体大王の意義

日本書紀には、継体が男大迹王として、この越前市辺りで育ったという伝えがあり、この土地かどうかの諸説もあるが、坂井市(旧丸岡町、旧松岡町)には大きな氏族の古墳があり、王冠や大刀、焼きものが出土しています。

朝鮮からの渡来人がもたらした技術と、継体の時代の越の国のものづくりの様相が其処ここに見えてくるのです。

越前和紙の里には「川上御前」の伝承があります。「岡太川の上流に一人の美しい女性が現れ、里人にねんごろに紙漉きの技を授け、名も告げず忽然と立ち去った」というものです。「川上御前」は古代の自然信仰―ことに水の神様・水分神への崇敬から生まれたものですが、同時に渡来の才伎(技術者)達が紙漉きの技をもたらしてくれた事への敬慕の思いが重ね合わされていると解されます。また、和紙の里に隣接する服部谷朽飯には織物の神様を祀る八幡神社がありますが、ここは渡来の機織りの集団が住みついた地といわれています。

さらに日野山、燧はな、平吹等の地名が残っていますが、火とはまさに鉄のことで、「平吹き」とは鉄を吹くということです。出土している環頭大刀や冠は、朝鮮半島のものと類似しており、当時から交流があったことは明白です。この辺りには丹生郡という地域があり、奈良時代、丹生とは、すばらしい土地＝水銀が出るところ、という意味でした。すなわち、金メッキには水銀がなくてはならないわけで、大王の王冠の金メッキと、鯖江のメガネのメッキ技術は繋がっています。越前市では白鳳時代の須恵器の登り窯が発掘されていて、古代の大寺院の棟の両端に取り付けた装飾で、今のしゃちほこのような鴟尾という焼きものが出ています。現在の越前焼のルーツでしょう。鴟尾があったということは、寺院が多くあったということです。単なる継体大王の伝説とロマンを語るのではなく、継体を押し上げた力の源泉を探ろうというのが「こしの都千五百年プロジェクト」の意義なのです。

●和紙産地の挑戦

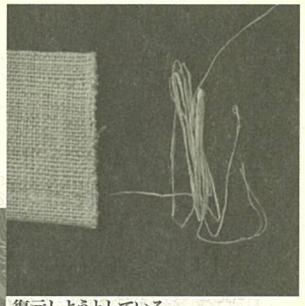
丹南の地は、このように千五百年前から継体大王と渡来文化の結びつきから始まったハイテク技術の集積地で、ものづくりの文化があったから、現在でもこの地域に刃物、塗り、焼きもの、織物、和紙などの産業が息づいていると考えられます。そこで現在の技術が伝統の中でどう生きてきたか、技術的に乗り越えたもの、乗り越えられないものを科学的に検証し、将来の「もの・ものづくり・ものづかい」を展望しようと思っているわけです。

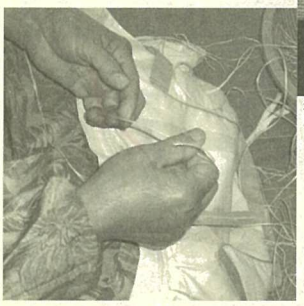
具体的には、原点を体験するという意味合いで、古代のものを復元してみようと考えています。焼きものの分野では、土師器に加えて渡来人がもたらした須恵器

昨年11月にはプレイベントも開催された

（高温で焼き締めるため器の水漏れがなくなった）を復元します。大王のシンボルの環頭大刀や冠を復元することによって、製鉄、鍛造、メッキ、木工、漆の技術等を検証します。和紙の分野では、古代の紙を復元する予定です。文献を調べていくと、古代では織りと和紙の技術はルーツが同じで、どうも衣料の材料として使われていた楮の皮の繊維＝木綿（ゆう）を製作する過程で、この繊維が紙にもなるという事を発見したらしいのです。私達は、この古代紙のルーツである木綿をまず復元し、後に正倉院文書にも載っている穀紙、麻紙、斐紙を漉いてみようと思います。楮で漉いた穀紙は奉書の原点、雁皮で漉いた斐紙は鳥の子の原点です。麻紙は、大正十五年に岩野平三郎が復元していますが、是非とも、正倉院文書より古いものを作ってみたい。ワークショップや展示会も勿論やります。

徳島県旧麻植郡に木綿（ゆう）制作の研修へ


復元しようとしている
古代紙のルーツ、木綿（ゆう）



●「ものづかい」へのバネに

パート2として考えているのは「ものづくりのDNAを受け継ぐ継体の子孫達」と題した講演会とシンポジウムです。近隣の中学校の同級生が四人も「NHKプロジェクトX」に登場している。ロボット、ビデオ、新幹線の技術、旋削加工技術等を開発した人等で、他にもすぐれた技術者を多く輩出しています。今、越前で製造している紙の九十％は、明治・大正・昭和初期に創り出されたものです。越前和紙はそれぞれの時代に融合するものづくりを受け継いできたのです。今その感覚が眠ってやしませんか？古代の技術集積地の遺伝子を私達は持っているのだから、もう少し自前の技術を伸ばすようにみんなで協力しましょうよー、という意味合いを込めたいのです。しかし、大変だねー、これだけのことをやり遂げるのは。（笑）

※なお、本プロジェクト関連の催しや展示会は、今秋に行われる予定です。

情報欄

●イベント情報

■越前　「神と紙のまつり」
紙祖神 岡太神社・大滝神社例大祭
時：2007年5月3日～5日
場所：紙祖神 岡太神社・大滝神社（越前市大滝町）

■越前　「神と紙のまつり」
大掘り出し市・和紙のはかり売り
時：2007年5月3日～5日
場所：和紙の里通り周辺（越前市新在家町）

■和紙と現代美術展（秋山信茂展）
時：2007年4月14日～5月20日（火曜日休館）
場所：卯立の工芸館

■紙の博物館リニューアル特別展（仮称）
時：2007年4月中旬～5月（火曜日休館）
場所：紙の文化博物館

■第27回越前陶芸まつり即売会
時：2007年5月26日～28日
場所：越前陶芸村（小曽原）

例年賑わう越前「神と紙のまつり」

お詫びと訂正
前号、「越前和紙への提言-横山祐子さん」記事中、「handmadejapan.comは一日に50万ヒット」と記しましたのは「一月に50万ヒット」と誤りでした。ここにお詫びして、訂正します。

編集後記
本年度は産地の大きな取組として継体天皇即位1500周年の様々の企画をご紹介しました。技術集積地であった近郊の匠の里から、新たな決意を元に、面白い動きが切磋琢磨して出てくることを願って。（よ）

季刊-和紙だより　第14号（2007年春号）　発行日：2007年3月31日
※無断での転写・転載はお断りいたします。
発行人：福井県和紙工業協同組合　山田益弘　住所：福井県越前市大滝町11-11　TEL：0778-43-0875　FAX：0778-43-1142
編集人：右衛門佐美佐子事務所　右衛門佐美佐子・田中裕子　編集所：〒606-8225　京都市左京区田中門前町90　TEL：075-712-8834　FAX：075-702-6223